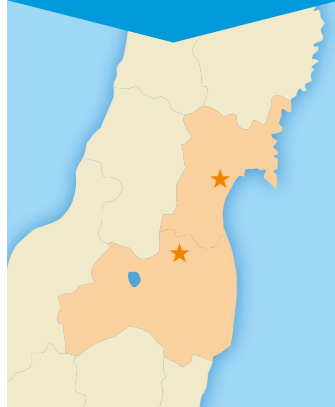


事例3

東北  
クラスター



# 震災からの復興と 地方創生をテーマに 東北から世界に向き合う

地方創生イノベーションスクール2030の六つのコアクラスターの中でも、2012年から2年半にわたって展開した「OECD東北スクール」の経験と実績を最も受け継いでいるのが東北クラスターである。東日本大震災から5年余りが過ぎ、震災からの復興と地域創生に中学生や高校生はどう参画しているのか。福島県立ふたば未来学園高校の取り組みを軸に報告する。

OECD日本イノベーション教育ネットワーク 東北クラスター プロフィール

東北クラスターでは、「Think Green」をテーマに、「OECD東北スクール」の成果を踏まえ、地元企業やNPO法人と連携しながら、環境問題や再生可能エネルギーといったテーマを中心に震災復興を見据えた活動を展開していく。参加校は、ふたば未来学園高校のほか福島市の中学校2校、宮城県気仙沼市内の中学校6校と県立高校1校で、福島大学が事務局を務める。海外のパートナーは、ドイツのエルンスト・マッハ・ギムナジウム。

## 未来に対する危機意識を発信し、 社会と自分を結びつける

2030年の社会を見据えて、「地方創生」をテーマにそれぞれの地域課題を解決するプロジェクトに中学生、高校生が取り組む地方創生イノベーションスクール2030。2017年8月に予定されている生徒国際ラウンドテーブルでの「2030年の社会づくりへの提言」に向けて、東北クラスターでも活動が続いている。

東北クラスターの代表で、福島大学理事・副学長の三浦浩喜氏は、「震災からの復興と、2030年からの社会課題の解決を重ね合わせ、解決に取り組んでいくという活動方針は、OECD東北スクールと同じ」と説明する。しかし、東日本大震災から5年が過ぎ、変わりつつあるものもある。



福島大学 理事・副学長  
総合教育研究センター長  
東北クラスター代表  
**三浦浩喜**  
みうら・ひろき

「子どもたちの中から震災の記憶は次第に薄れ、生活は良い意味で普通に戻りつつあります。でも、ほかの地域の子どもたちと同じかといえば、やはりそうではありません。少なくとも彼らは、『まさか』と思うようなことでも実際に起こることがあると知っています。そのことは、自然災害にとどまらず、これからの社会の課題に対する危機意識として根付いていると私は感じます」(三浦氏)

日々の暮らしの中で「震災」「復興」を切実な問題として語り合う場面は減っていても、東北の子どもたちの内面には「社会に対して言いたいこと」がたくさん詰まっている。それを適切に引き出し、社会へ発信していく場が東北クラスターの活動だと三浦氏は考える。そのため、これからの社会がどんな課題に直面するのかを学ぶだけでなく、子どもたち一人ひとりが自分自身の過去の経験や感情を振り返り、社会と自分がどのように結びついているのかを自分の成長のストーリーとして振り返るといった、個人と社会を接続するワークショップも盛り込んだ。

「かつて、OECD東北スクールの生徒たちに対して、駐日フランス大使は『あなたたちは東北に生まれた責任と、世界市民としての責任を果たさなければいけない』と鼓舞



東北クラスターとしての3回目の活動は、3泊4日の集中合宿。今後も、識者による講義によって知見を広めたり、プロジェクトのマネジメント手法や成果物の表現技術などを学んだりしながら活動が進んでいく。

しました。東北クラスターに参加する生徒たちにも、社会は自分たちがつくるものなのだということがついてほしいのです」(三浦氏)

地域の、そして地球規模の課題に向き合ったとき、子どもたちはその解決のために地域の中で、そして地域の枠を越えて連携を始める。東北クラスターの活動においても、学校や地域の枠を越えながら、東北、日本、世界を創り上げるチームづくりを進めていってほしいと三浦氏は語る。

## 復興への課題を探究する中で 社会で求められる汎用的能力を育む

東北スクールに参加する福島県立ふたば未来学園高校は、「原子力災害からの復興」をテーマに、地域課題の解決と地域再生の実践に取り組んでいる。2015年度に文部科学省から「スーパー・グローバル・ハイスクール(SGH)」に指定された同校では、1年次の「産業社会と人間」で復興を進める地域の課題を題材にした演劇の制作、2年次の「総合的な学習の時間」で未来創造探究として週4時間、六つの探究テーマに分かれて、課題解決型学習を進めている。3年次では、さらに週3時間で個人研究を進め、原子力災害の克服に関する研究成果をまとめ、学術研究会などでの発表や自治体に対しての提言を行うことになる。

同校では、「生徒に育てたい力」をルーブリックとして全教師の検討のもとに設定。授業の展開や学習評価における意識統一として活用している。副校長の南郷市兵氏は、「本校で育成をめざす資質・能力は、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力であり、各教科の学習だけでなく、カリキュラム全体で総合的に高めていくことが求められる。その軸となるのが、3年間を通じて取り組む探究だ」



福島県立ふたば未来学園高校  
副校長  
**南郷市兵**  
なんごう・いっぺい



福島県立ふたば未来学園高校  
企画・研究開発主任  
**對馬俊晴**  
つしま・としはる



ふたば未来学園高校は、学校づくりに地域の声も広く取り入れる。2019年4月に向けての新校舎設計でも、設計業者と生徒と地域によるワークショップが開催され、「夢を実現する場所」としての校舎のあり方が話し合われた。

と課題解決型学習の価値を説明する。

「課題解決型の探究学習を通して、生徒の課題解決力やコミュニケーション力など、教科学習では見えにくい力が生徒にどう育っているかを把握することができます。また、

図 ふたば未来学園高校のSGH 六つの探究班の概要

学習・実践の目的	1. 福島県及び企業・関係団体、大学・国際機関と連携し、グローバルな課題である「原子力災害からの復興」をテーマの中心に据え、その原因、背景、過程について同種事例なども参考にしつつ、研究・検証し、グローバルな視点から地域課題の解決及び地域再生の実践を行う。 2. 国内外での研究成果発表や提言を行う(復興庁、環境省、自治体等)。					
探究内容	原子力防災探究	メディア・コミュニケーション探究	再生可能エネルギー探究	アグリ・ビジネス探究	スポーツと健康探究	健康と福祉探究
	<ul style="list-style-type: none"> <li>原子力災害によって失われた地域コミュニティの再構築について探究する。</li> <li>エネルギー、コミュニティ再生、産業再生等、新たな社会システム創造を模索</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>海外を含めた、異文化の方々に向けた情報発信や、コミュニケーションの有効な方策を探究する。</li> <li>風評や風化メカニズムの研究</li> <li>情報が社会に与える影響の研究</li> <li>さまざまなメディアの可能性や先端技術・事例の研究</li> <li>実際のメディア制作</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>福島の現状を踏まえた、望ましい人間社会と、地球環境やエネルギーの関係性について探究する。</li> <li>福島のエネルギーについて知る</li> <li>諸外国のエネルギー政策の研究</li> <li>再生可能エネルギーの先端技術の研究</li> <li>再生可能エネルギー先駆けの地である福島を国内外に広く発信していく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>福島の復興につなげる、今後の農業とビジネスを探究する</li> <li>農林漁業生産と加工・販売の一体化や、地域資源を活用した新たな産業の創出を促進するなど、農山漁村の6次産業化を推進(農業「総合実践」商業「商品開発」等で実践)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>福島の地域を、スポーツを通じて豊かにする方策を探究する。</li> <li>総合型地域スポーツクラブによる地域の絆の強化、健康増進、こどもたちのスポーツ環境支援、トッププロと地域スポーツの好循環</li> <li>五輪を契機とした地域社会の活性化の方策</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>福島の地域において、少子高齢化が加速する中での健康長寿の実現の方策を探究する。</li> <li>中核病院、地域医療、介護、福祉が結びついた地域包括ケア</li> </ul>

探究学習を通じて地域の課題をリアルに感じることで、これからの社会にどうかかわってきたいかを自分に問いかけ、教科を学ぶ意味を見出していく生徒はたくさんいます。『探究学習に取り組むうちに、コミュニケーションツールとしての英語の大切さがわかりました!』と生徒が私に話してくれたり、おとなしかった生徒が仲間や教師に対してしっかりと自分の考えを話せるようになる様子を見たりするたびに、探究学習の成果を実感しています」(南郷氏)

企画・研究開発主任の對馬俊晴氏は「想定外の学びが生



1年次には、生徒がチームになってフィールドワークに取り組み、そこで見出した地域の課題を演劇で表現する学習を行う。劇作家・演出家の平田オリザ氏が指導にあたる。

まれるのも探究の魅力だ」と話す。

「教科の枠にしばられず一体的に学ぶため、本校の探究学習は全教師が参加します。各探究では、テーマに関係性の強い教科と関係性が薄い教科の教師が混在して担当することになっています。複数の教科の教師が指導することで、生徒はテーマについて多様な角度からアプローチでき、教師の想像を超える発想を見せる生徒もいます」(對馬氏)

### スピード感とダイナミックさ、 受け継がれる価値を持った教育を

地域課題の発見・解決に向けた主体的・協働的なアクティブ・ラーニングを六つの探究で実践するふたば未来学園高校。「実社会の課題に高校生がかかわり続けることは、本校の建学の理念に重なるものであり、これからも大切にしていきたいものだ」と南郷氏は語る。

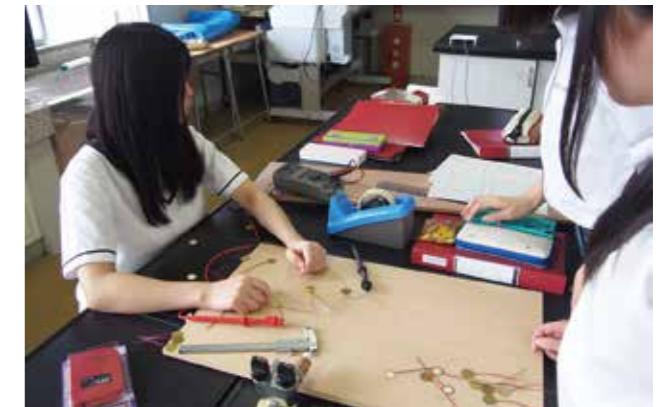
「そもそも本校の設立は、震災後、双葉郡の子どもと大人が県内外から集まり、双葉郡の教育復興について考え、対話した『双葉郡子供未来会議』が土台になっています。子どもが大人と同じテーブルについてこれからの教育や理想の学校を話し合った結果、生まれたのがふたば未来学園高校なのです。正解のない課題の解決に向けて社会を変革

するアクションを起こすことは、本校で学ぶ生徒の使命だと思います」(南郷氏)

事実、探究に取り組む生徒たちは、「高校の中だけの取り組みにとどまることなく、実際に地域社会の変革につなげたい」と意欲的だ。だが、学びの場が教室から飛び出していくほど、これまでの授業のようにすべてを教師がコントロールするのは困難になり、また社会と密に連携するほど、「高校生だから」といった甘えは許されず、取り組みにスピード感が求められる。SGHの活動として、学力も進路観も多様な生徒が地域課題に迅速かつ大胆に対処していくのか、同校の活動が充実するほど、そこに寄せられる期待と、担うべき責任は大きくなっていく。

「広島や長崎の平和教育のように、何十年という時間を経ても、その地域で受け継がれ、そして全国に発信される教育があります。私たちが暮らす東北では、自然との共存や技術革新を意欲的に追究する教育をつくり上げていきたいと私は思っています」(對馬氏)

「課題に対してとことん本気になれるような学び方はどのようなものか、本校では、生徒と教師が折に触れて語り合っています。一人ひとりの生徒が、主体的な市民としての社会とのかかわり方、生き方を見つけていく教育として活動を磨き上げていきたいです」(南郷氏)



写真上)再生可能エネルギー探究ではバイオマス発電のほか振動発電も研究。写真下)アグリ・ビジネス探究では、町役場の復興企画課を訪問するためのアポイントメントの取り方を、ロールプレイを行いながら学ぶ。

## 広い視野の能動的な学習で 地域の復興と世界への貢献を模索

原子力災害からの復興に貢献する人材の育成を目的とするふたば未来学園高校のSGH。しかし、生徒の視野は地域から世界へと大きく広がっている。

ふたば未来学園の6つの探究班の代表は、東北クラスターに参加し、校外の同世代との議論で得た視点と国際的な視野を自校に持ち帰り、さらに探究を深めている。SGHの探究と東北クラスターの目的がリンクすることで、生徒はそれぞれの学びの過程で、地域の復興と世界が抱える課題の解決が密接に結びついている事実が気付き、また、高校生でも社会に対して積極的にかかわっていく必要があることを実感する。そうした気づきを経て、いつしか生徒は「大学進学などで一時的に地元を離れたとしても、いつか必ず戻ってきて、地域の復興に貢献したい」「探究に限らず、普段の授業や学校行事でも『自分から始める』という積極性を大切にしたい」と、自分の生き方も大きく変えていく。



### 高校生のチャレンジが 未来のまちづくりの土台になる

2年生 佐藤勇樹さん

原子力防災探究では、地域コミュニティの再生を目標に活動しています。その中で私が取り組んでいるのは、地域の農産物を販売するマーケットを開催し、生産者と地域の若者、そして地域外の人々との交流の場にするというものです。実際に、学校のある広野町の直売所で、生産者の人たちに話を聞いて感じるの、若い人たちに農業に関心を持ってもらうことの難しさです。生産者と消費者が交流できるようなマーケットをつくりながら、農業を軸にしたコミュニティの再生に若い人たちをどんどん巻き込んでいくことができないかを考えています。

高校生の自分に地域のためにどれだけのことができるのかはわかりませんが、実を言えば、最初のころは「ほかの人がやった方がうまくいくのではないか」と思ったこともあります。でも、だからといって他人任せにするのではなく、自分で考えて、実際に行動に移してみることが、若い人たちによる町づくりの土台となるのではないかと最近では考えるようになりました。だから、今自分のできることを精一杯やってみようと思います。



### メディアの力を活かして 世界に発信、貢献したい

2年生 古市香菜子さん

メディア・コミュニケーション探究で、メディア制作に取り組んでいます。もともと外国の文化に関心があり、海外の人たちに福島のことを知ってもらいたいという思いはあったのですが、具体的に何を発信すればよいのかははっきりとはわからなかったのです。

そんな中で、東北クラスターの活動でドイツの学生とインターネットを介して交流するようになりました。彼らとやり取りする過程で、私は、ドイツの人たちが福島の復興の様子をほとんど知らないことに大きなショックを受けました。「海外の人と交流しながら、外国の人たちが日本についてどう考えているかを発信すると共に、福島の今を世界に伝えたい!」と思うようになったのです。

もう一つ、最近興味があるのが、スマートフォンなどで利用する復興支援アプリの開発です。例えばバーチャルリアリティシステムを使って、今も避難してよその町で暮らしている高齢者の方などが、自分の町の風景を仮想体験できるようなくみをつくりたいと考えています。メディアを使って、いろいろな人たちに貢献していきたいです。



### 世界共通の課題の解決を この地域からスタートさせる

2年生 安田卓弘さん

原子力防災探究に参加して、新エネルギーの開発を軸にしたコミュニティの再生をテーマにしています。具体的には、バイオエタノールから水素をつくり、発電するシステムを各家庭に設置し、それを全国、さらには世界へと広げていき、再生可能エネルギーが普及したクリーンな社会を実現する道筋を考えていきます。

探究に取り組み始めたころ、私は、「地域」の復興に貢献したいと考えていました。しかし、世界に目を向けて、今どんな課題を抱えているのかを知るうちに、エネルギー問題の解決は地域にとどまらず、世界への貢献になることに気がきました。探究に対する自分の中の関心も一気に高まった気がします。

今後は、バイオエタノールを製造する工場を広野町に造るなら、どんな場所にどんな規模の工場を建てることのできるのか、町役場の方たちと検討していきたいです。そして、バイオエタノールから発電する燃料電池システムを開発している企業に話を聞くなどして、再生可能エネルギーによる町づくりを実際に町に提案していきたいと思っています。